

第1回三番瀬評価委員会小委員会（自然環境調査関係）の開催結果（概要）

- 1 開催日時 平成19年9月25日（金）午後6時から8時30分
- 2 場 所 千葉県国際総合水泳場会議室
- 3 出席者 委員3名
- 4 参加人数 8名
- 5 配付資料 資料1 第4回三番瀬評価委員会の開催結果（概要）
資料2 三番瀬評価委員会小委員会の委員編成
資料3 三番瀬自然環境調査について
資料4 三番瀬自然環境調査年次計画（案）
参考資料 第4回三番瀬評価委員会資料2-1、2-2、2-3
清野委員からの意見

6 結果概要

（1）議題1「平成18年度三番瀬自然環境調査事業の評価について」

事務局から、資料3、参考資料に基づき、平成18年度に実施した自然環境調査結果の概要と、調査の結果、重要と思われるポイントについての説明があった。

委員からの意見等

- ・2000年代に入って生物が減少しているが、三番瀬全体で少し流況が変化することで、猫実川河口周辺に細かい粒子のものが溜まりやすくなって、それに対応して生物が変わっている印象を受ける。清野委員からの意見にもあるように、三番瀬を含め、その周辺の流況変化等を整理していただいたほうがよいのではないか。（野村委員）
- ・シルト・粘土分は、猫実川河口で増えているというよりは、市川航路のほうから流れてきている感じもする。（蓮尾委員）
- ・アサリの減少については、青潮、大規模出水及びアオサの発生というイベントとの関係に注目することが重要と考える。シルト・粘土等、底質と生物量との関係は説明が難しい。アサリ以外の生物についても何らかのインパクト、イベントからの影響という感じを受ける。（調査機関：（株）東京久栄 柿野）
- ・底生生物の調査では、調査方法による誤差、調査時期のずれ、潮時のずれなど、大きな誤差を含んだ結果であるという前提で考えていくしかない。こうした調査誤差を超えて本当に意味のある変化を、現在利用可能なすべてのデータの中から、いかに捉えるか考える必要がある。（望月委員）
- ・本当に変化がありそうだ、という場合に、その理由を含めて考えなければならない。理由になりそうな現象が見つければ、今度は、そこに調査の焦点を当てる必要がある。（望月委員）
- ・環境データと生物の量との関係等のデータの解析を、いろいろな面から進めていく必要がある。（望月委員）

- ・台風などのイベント、アオサの大量発生などの現象も含め、慎重な解析をする必要があり、その枠組みができていない。それが今後の課題となるのではないか。(望月委員)
- ・本調査は、外来生物や社会的に重要な生物についての独自分析ができていないため、今後考えていく必要がある。(望月委員)
- ・39の調査地点を総合して見るほかに、個別の測点の生物の変化を見ると、その要因が粒度組成だけには絞れない印象がある。(蓮尾委員)
- ・重要種・主要種について、種ごとの分析をもう少し整理する必要がある。(望月委員)
- ・現在の調査法だと、カキ礁自体の役割やその生物など、捉えられていない項目や生物がたくさんあり、今後、そうしたデータの洗い出しが必要になるかもしれない。(望月委員)
- ・三番瀬の中の流況が変わっていないのかどうか、調べる必要があるのではないか。(野村委員)
- ・それを20年度調査に活かしてはどうか(望月委員)
- ・市民運動とからめたアオサ調査を行ってはどうか。(野村委員)
- ・「三番瀬の日」のようなイベントで、市民にアオサ調査をしていただければ。(蓮尾委員)

会場からの主な意見

- ・アサリ等以外に、現在の調査で捕捉できていないと考えられる生物についても調べてほしい。
- ・猫実川河口域でヤマトオサガニが減少している状況があるので、その原因を調べてほしい。
- ・生物の種類数のほか、ベントスの湿重量の変動を見極める必要がある。
- ・生物量はイベントで変動するが、一定の大きな方向を見極める必要がある。
- ・アオサ発生と江戸川第二終末処理場の放流との関係など、アオサの生態を検討する必要がある。
- ・アオサのモニタリングは、水産局のデータが使えるのではないかと。

望月委員まとめ

- ・底生生物調査は、調査方法による誤差、調査時期のずれ、潮時のずれなど、大きな誤差を含んだ結果であり、こうした調査誤差を超えて本当に意味のある変化を、現在利用可能なすべてのデータの中から、いかに捉えるか考える必要がある。また、本当に変化がありそうな場合には、その理由も含めて考えなければならず、理由になりそうな現象が見つかれば、今度は、そこに調査の焦点を当てる必要がある。
- ・環境データと生物の量との関係等のデータの解析を、いろいろな面から進めていく必要がある。
- ・台風などのイベント、アオサの大量発生などの現象も含め、慎重な解析をす

- る必要があり、その枠組みができていない。それが今後の課題となる。
- ・外来生物や社会的に重要な生物についての独自分析ができていないため、今後考えていく必要がある。
 - ・流況調査の問題について、それを20年度調査にいかにか活かすかを考える必要がある。
 - ・今後、アオサ調査がひとつの課題と考えられるため、アオサに関する情報を収集し、再度議論したい。

(2) 議題2「平成20年度以降の調査の進め方について」

事務局から、資料3、4に基づき、平成20年度以降の調査の進め方について説明があった。

委員からの意見等

- ・18年度底生生物調査の結果、生物の状態が悪くなっている可能性があるため、測点を絞って追加調査をしてはどうか。(蓮尾委員)
- ・18年度のデータだけで判断するのは難しい。過去のデータも含めて再度データ間の検討をした上で、明確な減少傾向が出るのであれば、それから緊急調査を考えてはどうか。(望月委員)
- ・現在のデータで変化している生物を、その特徴で分けて検討してはどうか。(野村委員)
- ・江戸川放水路の放水データを示してほしい。(野村委員)

会場からの主な意見

- ・生物調査は、大潮時に徒歩で実施してほしい。
- ・22年度に実施予定の総合調査では、データを15年度まで遡って実施してほしい。
- ・横浜の海の公園におけるアオサのデータを活用したらどうか。

望月委員まとめ

- ・再度、生物、底質、江戸川放水状況等の過去のデータの洗い直しと再分析を行い、大きな変化がある事項が明確になった段階で、追加調査を要請することとする。

(3) 議題3「その他」

台風9号により江戸川放水路からの出水があったことを踏まえ、台風等の大きなイベントへの対応及び行徳可動堰についての意見を聞きたい旨、蓮尾委員から発言があり、事務局から、台風9号による三番瀬への影響についての説明がなされた。

委員からの意見等

- ・今回の台風の影響については、チェック体制が欠けていたのではないかと考えられるが、それには相当の予算が必要と思われるので、ちょっと難しいの

ではないか。(野村委員)

- ・県の水産部局や国土交通省の調査結果を提供いただく体制を整えたらどうか。

(蓮尾委員)

- ・イベントが、三番瀬の自然環境に及ぼす影響を把握する上では、関係機関の既存データでは不足することが考えられる。今後の研究課題を整理する必要がある。(望月委員)

会場からの主な意見

- ・江戸川放水路からの出水で一番被害を受けるのも、恩恵を受けるのも漁業者であると思うので、水産部局での調査と、市民調査を実施してはどうか。
- ・江戸川放水路からの出水で影響が少ないケースは、水位が上がる前に早めに放水した場合。逆に、ぎりぎりまで堰を開けず、堪えきれなくなって開けた場合は影響が大きい。国土交通省の見解を聞いておいてはどうか。

望月委員まとめ

- ・イベント時のモニタリングについては、まず出水時の対応に関して、関係機関からの情報を収集した上、今後、継続して議論していくことを、三番瀬評価委員会への意見としたい。

以 上